

通院治療センターにおける現状と今後の課題

Present status and future prospect of the outpatient treatment center

外来部門 所真由美 亀谷博美

要旨

近年多くの医療機関において、通院治療として、がん化学療法が実施されている。当院においても、平成17年4月、全診療科を対象に外来化学療法を行う「通院治療センター」が開設された。利用患者数は増加しており、乳腺内分泌外科の利用が全体の7割を占めている。

看護師の役割として、安全、安楽の管理と心理面へのサポート、副作用に対する説明と教育、病状や治療に対する不安の傾聴、患者を取り巻く環境へのアプローチ、診療科・他部門との連携が必要である

キーワード

通院治療センター 外来化学療法 看護師の役割

I. はじめに

がん患者のQOLの尊重や在院日数の短縮化の観点から、また支持療法の確立に伴い、外来化学療法の頻度は増加している。当院においては、従来、化学療法は外来処置室や一泊入院にて行われていた。平成15年より乳腺内分泌外科外来に外来化学療法加算（300点）の対象となる点滴室が設置されていたが、平成17年4月より「通院治療センター」が新しく開設され、全診療科を対象に外来化学療法を行っている。

今回、「通院治療センター」（以下センターとする）の現状を報告するとともに、これまでの活動を振り返り、センターの看護師の役割と今後の課題について検討した。

II. 研究方法

対象期間：平成17年4月～12月

1. センター利用患者の状況を月別・年齢別・診療科別・疾患別に分析する。
2. これまでの活動を振り返り、センターの看護師の役割と今後の課題について考察する。

Ⅲ. 結果

1. センター室内の紹介（図1）

リクライニングチェアが12台あり、6台ずつ昇降が左右で異なっている。それぞれカーテンで仕切られており、テーブルとテレビが設置されている。患者自身がチェアとして使用したり、ベッドとして使用したり、調節しながら治療を受けている。



図1 センター室内の紹介

2. センターの利用状況について

1) 月別利用者数（図2）

4月～12月までで、延べ1359人が利用し、開設当初より、月毎に増加傾向にある。

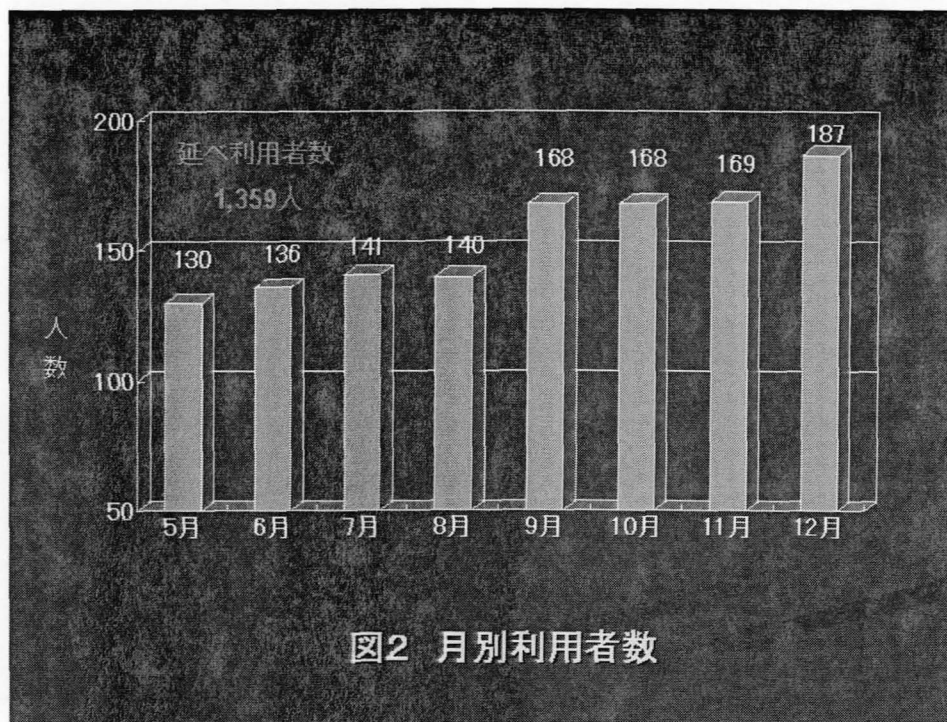
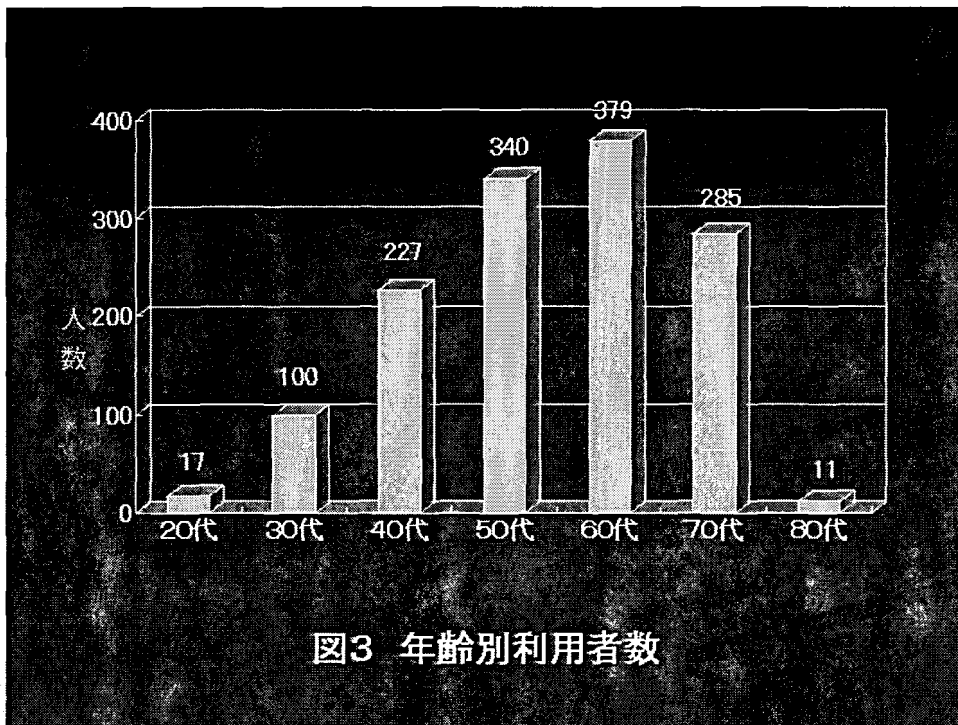


図2 月別利用者数

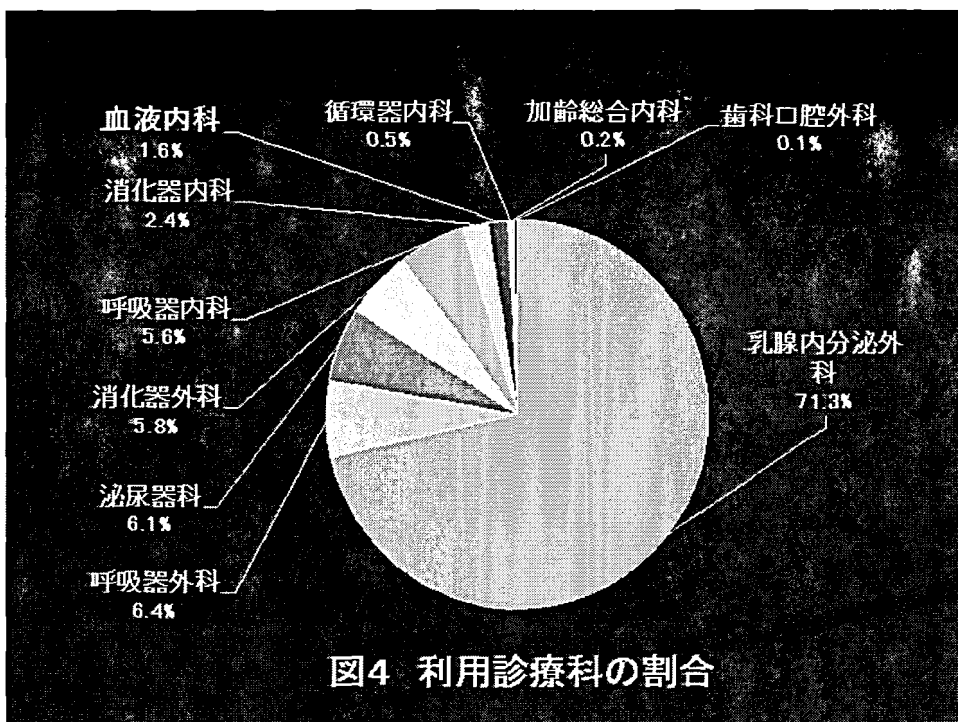
2) 年齢別利用者数 (図3)

20～80 歳代の患者が利用しており、60 歳代が最も多く、60 歳以上で半数をしめている。



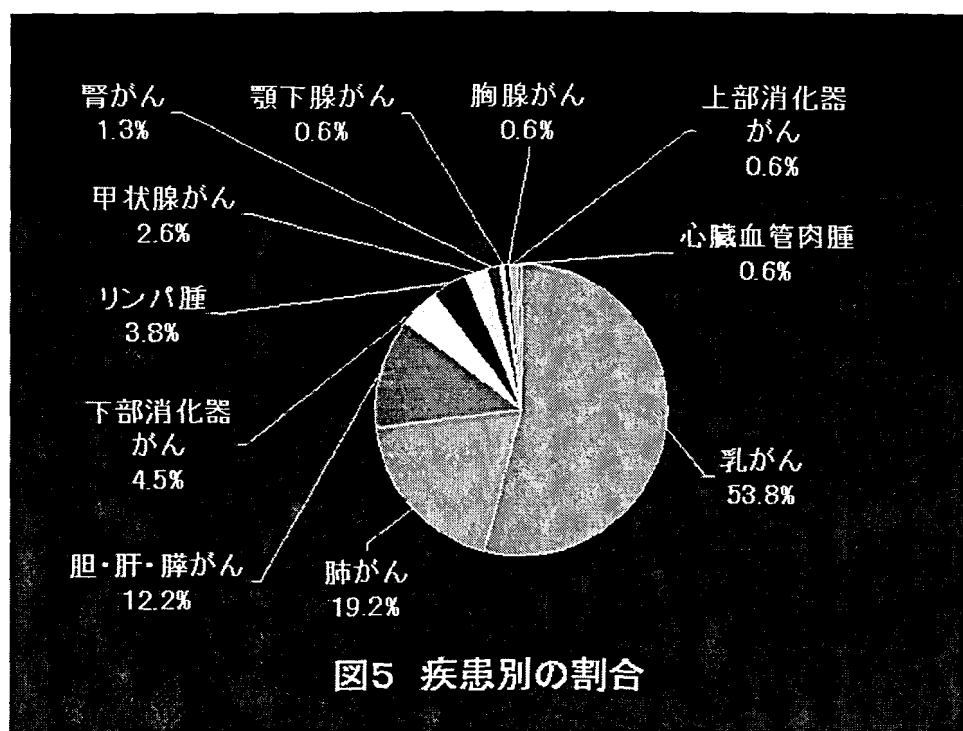
3) 利用診療科の割合 (図4)

利用診療科は、10 科で乳腺内分泌外科が71.3%と一番多く、次に呼吸器外科の6.4%、泌尿器科の6.1%、消化器外科の5.8%となっている。



4) 疾患別の割合 (図5)

疾患の割合は、乳がんが53.8%と最も多く、次いで肺がんの19.2%、胆・肝・膵がんの12.2%となっている。8割が女性である。



3. センターの運用方法

治療前日までに、医師が患者に外来化学療法について、インフォームド・コンセントを行い、センターの予約と注射オーダーの入力をし、サブカルテを作成する。サブカルテとは、患者基本情報や担当医師の連絡先、連絡事項などが記入できる連絡票と、治療計画書、医師の診療記録と看護記録が一緒になったクリティカルパスが入ったものである。

治療当日は、患者は採血後外来にて医師の診察を受けてから、外来カルテ・サブカルテ・注射ワークシートをセンター専用の搬送バッグに入れ、センターに来棟する。

センター看護師は薬剤部製剤室に調剤依頼の連絡を入れ、バイタルを測定しながら自宅での副作用の出現程度など確認する。注射薬の調剤が終了したら、薬剤部製剤室へ注射薬を受け取りに行く。

センター看護師2人で注射薬を注射ワークシート、治療計画書と照らし合わせながら、薬剤のダブルチェックを行う。外来または医師に血管確保依頼の連絡をし、診療科の医師も注射薬と患者確認を行い、留置針を刺入し治療が開始される。治療終了後は一般状態を確認後、帰宅する。

カルテ、サブカルテは夕方の搬送に載せ、外来に返却する。

4. 看護師の実際の関わり

導入時は、不安や緊張感が強く硬い表情で来棟する患者が多いので、笑顔を絶やさず暖かく迎えている。安心して治療に望めるように、診療の流れや設備などのオリエンテーションを行っている。患者は様々な思いでセンターに来棟するので、今後の病状や治療についての不安や期待などを傾聴し関わっている。

安全管理として患者の年齢や麻痺の有無、乳がんの患者では患側がどちらかを確認し、左右の昇降を考えベッド管理を行っている。

点滴中の管理としては、薬剤は注射ワークシートと一緒にベッドサイドに置き、ボトル交換時は必ず2人の看護師で確認している。特に、抗がん剤を投与時は刺入部の確認も行い、これから薬が投与されること、少しでも刺入部の疼痛、灼熱感、不快感などあったら我慢せずすぐに知らせよう声をかけている。しかし実際、患者は痛みを感じても様子をみてしまうことがあるため、看護師は頻回に観察している。

また、骨転移などの疼痛を訴える患者には安楽枕の使用や、マッサージ、体位変換などの援助を行っている。

なお、アナフィラキシーショックなどの緊急時で、治療責任医師に連絡がとれない場合はコードブルーを活用することになっている。

外来化学療法では、自宅や職場で副作用が出現することになり、医療者から離れていることから不安もさらに強いと考える。そのために患者が副作用をきちんと理解し、自分で対処できるように支援している。そして、夜間・休日などの緊急時の対応についても説明している。

センターの利用患者は女性が多いことから、副作用で家事ができない場合や自宅で家族を介護しているケースも多くある。患者自身にだけ目を向けるのではなく、患者を取り巻く環境へのアプローチも必要である。また、かつらの相談窓口がわからず困っているケースが多かったため、ポスターを業者と共同作成しセンターに掲示したり、カタログを準備し脱毛を気にする患者に紹介している。

通院治療センターは他部門との連携が不可欠である。情報交換の方法として、外来看護師へパスや申し送りをするほか、センター利用診療科の7割が乳腺内分泌外科であることから、乳腺内分泌外科外来看護師とは、毎朝5分程度のミーティングを行っている。術前化学療法を実施した入院予定の患者の情報は、外来サマリーを病棟へ送り継続看護につなげている。また、入院中より化学療法を行い外来化学療法に移行する患者については、退院サマリーを活用し情報収集を行っている。

昨年8月より東8階病棟にて、乳がん患者に対しトータルなケアを提供するための部門を越えた専門チームとして、ブレストケアチームが立ち上がった。センター看護師もチームの一員として、毎月カンファレンスに参加している。その他の診療科に対しては、各疾患の化学療法について医師に講義を依頼し、外来看護師や製剤室の薬剤師と勉強会を開催している。

また化学療法の医療費は高額となり、経済的な不安のある患者には医療福祉支援センターを紹介している。

センターの看護師は患者の想いをいち早くキャッチし、主治医や外来看護師、薬剤師、ソーシャルワーカーなどへ橋渡しをするコーディネーターの役割も担っている。

IV. 考察

通院治療センターの看護師の役割としては、以下のようにまとめられる。

- 1、オリエンテーションを行いスムーズな導入を図る。
- 2、安全、安楽の管理と心理面へのサポート
- 3、副作用に対する説明と教育・支援
- 4、病状や治療に対する不安の傾聴と支援
- 5、患者を取り巻く環境（家族、経済面、職業）へのアプローチ
- 6、診療科・他部門との連携（コーディネーター役）

今後の課題として、現在のクリティカルパスではセンターから診療科への情報提供のみであるため、今後他部門とのカンファレンスをもつことやパスの見直し、システムでの記録の活用を検討していきたい。

また化学療法のインフォームド・コンセントに看護師が同席したり、退院後外来化学療法に移行する患者に対し、病棟訪問しセンターのオリエンテーションを行っていくことなども検討している。

現在、専任の薬剤師は注射薬剤の調剤のみになってしまっている為、今後、センター内で抗がん剤の副作用についての説明など薬剤師の介入を進めてもらえるよう考えていきたい。

V. まとめ

センターを利用している患者からは、「看護師が常に近くにいて安心」「看護師に不安なことをすぐに相談できる」などの声が上がっている。センターの利用患者の治療内容は多岐に渡っており、多くの知識が必要である為、疾患・治療の学習を重ね、今後患者が安心して安全に治療が継続できるように支援していきたい。

VI. 参考文献

- 藤田智恵子、中田和美、高島幸恵他：京都大学医学部附属病院外来化学療法部の活動状況について
ー外来化学療法における看護師の役割ー，医薬の門、44（6）、56（2004）
- 坂下智珠子：外来がん化学療法を行うためのポイント，月刊ナーシング、25（13）66、（2005）
- 田中登美：患者教育と援助，月刊ナーシング、25（13）、70（2005）
- 中堂蘭百恵：チーム医療，月刊ナーシング、25（13）、76（2005）
- 朝鍋美保子：通院化学療法の実際と看護師の役割，月刊ナーシング、24（2）、76（2004）
- 仙田順子：外来化学療法における看護記録の実際，がん化学療法 看護実践集第1版、日総研出版、
144（2005）
- 村島明子：外来化学療法におけるクリニカルパスの改良と取り組みー患者満足度調査の結果よりー，
がん化学療法 看護実践集第1版、日総研出版第、159（2005）
- 三木幸代：がん化学療法における安全管理の考え方，がん化学療法 看護実践集第1版、日総研出
版、26（2005）